

ラテン中世の「寿命の延長」 (prolongatio vitae) について

——ロジャー・ベイコン、錬金術、教皇宮廷——

藤崎 衛

はじめに

枢機卿ロタリオ・デイ・セーニが1195年に著した『人間の悲惨な境遇について』(*De Miseria condicionis humane*) には「老齡の不安について」という項目がある。この枢機卿はのちにローマ教皇インノケンティウス3世として教皇座に登位する人物である (Innocentius III, 在位1198—1216年)。当該箇所を引用してみる。

人間の境遇の起源においては、人々は九百年以上も長生きしたと言われる。しかし、人の寿命が次第に短くなるにつれて、主はノアに言われた。「私の霊は人間のなかに永遠に留まるべきではない。なぜなら、人間は肉にすぎず、その一生は百二十年になろう。」生の終わりや悔悛の期間についてと同様に、このことは理解できる。なぜなら、それ以来人間はそれ以上長生きしたのは、ごく稀であると言われるが、寿命がますます短くなるので、詩編作者はこう言っている。「人生の年月そのものは七十年で、健康ならば八十年であるが、その大部分は苦勞と災いである。」「私の短い人生は瞬く間に終わる。」「我らの年月は織物が職工に切られるよりも速く過ぎ去る。」「人は女から生まれ、人生は短い。」今や、四十歳まで生きる人々は少なく、六十歳生き延びる人は極めて少ない。しかし、人が老齡まで達しても、直ちにその心は衰弱し、頭は震え、気力は萎え、吐く息は臭く、顔は皺がより、背は曲がり、眼はかすみ、関

節はよろけて、鼻水をたらし、頭髮は抜けて、触覚は衰え、歯はもろくなり、耳は遠くなる。老人は怒りっぽく、容易に機嫌が直らず、信じ易く、疑うのに手間がかかり、頑固で食欲であり、気落ちして不平が多く、おしゃべりで、聞く耳を持たず、癪癪持ちである。さらに、昔のことを誉め、新しいものをけなし、現在を非難して過去を称える。また、老人はため息をついて心配し、不安に苛まれて衰弱する。詩人の言葉を聴くがよい。「多くの不安が老人を取り巻いている。しかし、老人は若者に対して得意にならず、若者も老人に不遜になってはならない。なぜなら、我々は老人の昔の姿であり、いつの日か我々も老人の今の姿となろう。」(瀬谷幸男訳¹⁾)

人生のさまざまな局面におけるはかなさを連ねたこの作品において、罪びとはだれであれ、老いを迎え死に行くのだという厳かな事実をこの箇所は想起させようとしている。人生は短く人は朽ちていく。しかしこのような惨めな老化は克服することはできないのか。そして短い人生を少しでも延ばすことはできないのか。インノケンティウス3世に始まる13世紀という時代において、そして教皇たちの身近で実際に試みられた、老化を遅らせるための理論と実践について、これから考察してみたい。

1. ボニファティウス8世と寿命の延長 (prolongatio vitae)

枢機卿ロタリオが上述の作品を著してからからはほぼ1世紀後、教皇の位に就いていたのはボニファティウス8世 (Bonifatius VIII, 在位1294—1303年) である。まず、この教皇に言及した詩の一節を引いてみよう。

おまえは魔法をつかって 寿命をのばそうとした。

年も日も時間も 人間にはどうにもならぬ。

罪を犯すうちに、 不意に人生は終わるのだ。

享樂のまっただなか、 死はしのびよる。(須賀敦子訳²⁾)

これはフランシスコ会士ヤコポーネ・ダ・トーディ (Jacopone da Todi, 1230—1306) が『讃歌 (ラウデ)』において教皇ボニファティウス8世を糾弾している詩の一節である。教皇と対立したことで破門されてしまったことに對する相当な恨みもあったからであろう、ヤコポーネは同じ詩の中で教皇を「新たなルチフェロ」(Lucifero novello) と罵っている。だが、はたして教皇は、実際に寿命を延ばすために魔術に没頭でもしていたのであろうか。

回答はさしあたり保留しておくとして、この教皇が寿命を延ばそうとしていたということは根拠のないことではない。ほかにも証言がある。

たとえば、アラゴンの使節ゲラウ (Guerau d'Albalat) は1301年9月14日教皇宮廷でアルナウと出会っているが、この日ゲラウはアラゴン王ハイメ2世 (Jaime II) にこう書き送っている。「教皇が取り組んでいるのは三つのことだけで、それらにすべての関心をよせています。つまり長く生きること、金銭を得ること、そして三つめに自分の取り巻きを富ませ高めようとすることです³⁾。」またゲラウは同じ書簡において、枢機卿たちからの伝聞として、カタルーニャ人医師アルナウ・ダ・ビラノバ (Arnau de Vilanova, 1238—1311) が教皇のために結石の痛みを感じないように印章とベルトを作ったと述べている⁴⁾。やはり同書簡によるが、教皇がナポリ王シャルル・ダンジュー2世 (Charles II d'Anjou) に次のように語っている。「私は実際よきことをなした一人のカタルーニャ人を知っている。それはすなわちアルナウ・ダ・ビラノバで、彼は私に金の印章と私が身につける帯とを作ってくれ、結石の痛みとそのほか多くの苦しみから守り、私を生かしてくれた⁵⁾。」

このようにボニファティウスが病気の恢復ないしは寿命の延長について関心を寄せていたことは確かであるように思われる。実際、この教皇は健康がすぐれていなかった。彼は特に腎臓結石を患っていたが、引用した証言からはその対処として医師アルナウが作った獅子座の印章をもっていたということがわかる⁶⁾。ここから当時における医学と占星術との間に何らかの関係性があったということを指摘することができる。また、腎臓結石は有機物と無機物の境界にあるということから、錬金術において卑金属から金を生成する

触媒となる「賢者の石」(lapis philosophorum) と並行関係にあると考えることもできる⁷⁾。そうすると、獅子座の印章は占星術のみならず錬金術とも関連づけることが可能である。

2. 13世紀の教皇宮廷と寿命の延長 (prolongatio vitae)

ところで、寿命の延長に関心をいだいていたのは腎臓を患っていたボニファティウス8世だけに限られるわけではない。ボニファティウスに先立つ数十年間において、教皇宮廷の周辺では寿命の延長や若返りの術について知識人たちがたびたび議論を交わしていたことが知られている。この点について次にみていこう。

2.1. 老化の遅延—『老年の症状の遅延について』—

ここで取り上げる『老年の症状の遅延について』(*De retardatione accidentium senectutis*)⁸⁾の一冊は、教皇インノケンティウス4世(Innocentius IV, 在位1243—1254年)に献呈されたものである⁹⁾。その著者については、従来ロジャー・ベイコンであるとされ、中世においても14世紀にはロジャー・ベイコンのものだといわれている。しかし否定的な見解も提起されている¹⁰⁾。本稿は著者の推定をおこなう場ではないが、さしあたりベイコンではないとの見解をとる。だがむしろここで重要なのは、この著作が教皇に宛てられたものであったということである。

この著作は後でみるベイコンの著作にもしばしば引用され、また著者が上述のアルナウ・ダ・ピラノバに帰されることもあったことなどからすると、中世のラテン西洋世界に大きな影響を与えたということは十分推測することができる¹¹⁾。それはおそらく、この著者がアヴィケンナ(イブン・スィナー)の『医学典範』(*Canon medicinae*)やアラブから伝わった偽アリストテレスの『秘中の秘』(*Secretum secretorum*)を最も早い時期にふんだんに参照していたという点において画期的であったからであろう¹²⁾。

著述の目的は統治者が長きにわたって統治することができるための秘訣を

伝えるためであり、特に若さを保つということに焦点があてられる¹³⁾。それを可能にするのは養生法と秘匿された医薬であるとされる¹⁴⁾。しかし著者自身が主張することであるが、従来の養生法と異なるのは、若さを保つだけではなく老化を遅らせるということにある¹⁵⁾。著者によれば、空気や体の動き、体液のバランスなど、老化をうながす要因はいくつもあり、健康を保ち長命を可能にするためにはこれらに気をつけなければならないが、たいていの人はそれができない。このように著者は老化の原因を指摘し、また老化の諸徴候を挙げていく。そしてさまざまな対策を提示する。そこには薬学的な知識にもとづく健胃薬や下剤など薬の処方もあれば、食餌療法、嘔吐や浣腸、瀉血、入浴などを実践することも勧められる。しかしわれわれにとって興味深いのは「古代から秘匿されてきた医薬」(medicine occultate ab antiquis)にも著者が注目しているという点である。地中に隠されているもの(金)、海に漂うもの(龍涎香)、地上を這うもの(蛇)等々と列挙されるこれら秘薬¹⁶⁾は、以下にみるようにベイコンが『大著作』において若干の変更をともなって引き継ぐことになる。しかし、ベイコンはこれら秘薬にとどまることのないさらなる展開をみせることになる。

2.2. ロジャー・ベイコン『大著作』における寿命の延長 (prolongatio vitae)

そこで、イングランド出身のフランシスコ会士ロジャー・ベイコン(Roger Bacon, c. 1214—c. 1292)に確実に帰すことのできる作品をみていこう。それは教皇クレメンス4世(Clemens IV, 在位1265—1268年)の依頼によりこの教皇に1267年遅くまたは1268年初めに献呈された『大著作』(*Opus majus*)である。ここでは二つの簡潔な考察、つまり寿命の延長をもたらす薬についての「例2」および錬金術についての「例3」を検討する¹⁷⁾。

まず『大著作』第6部の「例2」におけるロジャー・ベイコンの所説を高橋憲一氏の訳にも負いつつまとめておくと、次のようになる¹⁸⁾。世界の初めのころは寿命は相当に長いものであったが、墮落と養生法の欠陥のために寿命は短縮してしまった。「従って父たちは墮落し、また死に急ぐ性向をもった

墮落した息子たちをもうける。そして次に養生法の欠陥により子らは自らを駄目にし、こうして子の子らは二重に悪い性向をもつ。そして第三にはみずからが養生法の欠陥のゆえに駄目になる。こうして父から子らへと形質の墮落が伝わり、ついには現在起こっているように終局的な〔死への〕早急さがつくられている¹⁹⁾。」そこでまず、人間は六つの養生法によりある程度寿命を延ばすことができる。つまり、(1) 食物と飲物、(2) 睡眠と覚醒、(3) 運動と安静、(4) 排泄と抑制、(5) 空気、(6) 魂の諸状態を節度をもって維持することである。しかし人は寿命についてはさらに神と自然によって別の二つの限界が定められているという。第一の限界は経験学の助けをかりることによって(まれであるとしても)克服可能であるが、人はすべからず死すべきなのであるから第二の限界は克服することができない。

この第一の限界を超えていくことが、ペイコンの提唱する経験学が目指すものであるが、それは具体的には寿命の延長を可能にする薬の探究として示される。そのためにさまざまな古典的権威が手掛かりとしてひかれる。ディオスコリデスは「老年の早さと四肢の冷却、乾燥から人間を防ぐような或る薬が存在し、それによって人間の寿命が延ばされることは可能である」と述べている。また、『テグニー註解』のハリーは「長く生きた人々は彼らの寿命を延ばすような諸々の薬を使った」と述べている。また、経験学に没頭した賢者たちは、寿命を延ばす動物の勤勉さに刺激されて、考えをめぐらした。彼らは動物をつけねらったが、それはみずからの身体を多くの奇跡的な仕方ですすような薬草、石、鉱物、その他の事物の諸力を知るためであった。また、『秘中の書』においてアリストテレスは「口では言い表しえない栄光とか哲学者たちの宝庫とか呼ばれ、人間の身体全体を十全に治すような薬があり、それはアダムあるいはエノクによって発明された」と述べている。さらに、アルテフィウスは秘法的諸経験によって数百年も生きたと彼の哲学の書の中で述べられている。また、プリニウスの『博物誌』によれば、皇帝アウグストゥスの面前に立った百歳以上もその寿命をのばした人物がその秘訣を聞かれて「外側には油を、内側には密酒を用いました」と謎で答えたという。

さらにペイコン『老年の諸徴候についての書』(本稿で検討した『老年の

症状の遅延について』)を引き合いに出して、シチリア王グリエルモの時代の逸話に言及する。つまり、ある男が畑の地中にあった金色の容器に隠されていた最良の液体を手に入れ、それを飲み、顔を洗ったところ身も心も並外れて新たにされた。最良の油で(両足の裏を除く)全身を塗油したことで(両足の裏を除いて)腐敗することなく数百年も生きたのである。そして同じく『老年の諸徴候についての書』を引きつつ、(1) 第四の度合いで鍛えられたものつまり「金」、(2) 海で生まれたものつまり「真珠」、(3) 空中で育成したものつまり「アントス(ローズマリーの花)」、(4) 海からうち上げられたものつまり「龍涎香」、(5) インド産の苗つまり「若いアロエの木」、(6) 長命な動物の臓物つまり「牡鹿の心臓中で生成される骨」、(7) ティルス人とエチオピア人の食料である這うもの二匹つまり「ティルスの蛇と竜」、これらが適正に調合され、(8) (人間の血を指すと思われる) 高貴な動物の鉱山(minera) が加わることで、老年と老衰の諸状態を遅らせ軽減することができるという。しかしこれまでの著名な哲学者達も医学もこのような薬を獲得することはほとんどできていないということである。

以上のベイコンの考察から、寿命を延ばすには古代から伝わる六つの養生法だけでは不十分で、経験学に基づく秘薬の入手が必要となるということがわかる。これは、技術(ars)が自然(natura)を超えうるというベイコンの思想の射程を如実に表している一例ともいえるだろう。とはいえ、ここまでの議論は『老年の症状の遅延について』を祖述しているだけであるともいえる。しかし、これに続いてベイコンは『老年の症状の遅延について』にはない要素を含ませるのである。

そこで「例3」をみていこう。ここでベイコンの議論は、錬金術にまで関わってくる²⁰⁾。彼は偽アリストテレス文書(これは中世においてはアリストテレスの真作であると考えられていた)に触れつつ次のように述べている。

このことのゆえに、アリストテレスはアレクサンドロスに対し、「私は最大の秘密を明らかにしたい」と述べたのである。実際それは最大の秘密である。なぜなら、それは金の充溢ゆえに、国家の利益および万人

に必要とされるものを獲得するのみならず、またはるかに価値あることには、寿命の延長を与えるであろうから。なぜなら、卑しい金属のあらゆる穢れと墮落を取り除き、きわめて純粋な銀と金を生じさせるような医薬は、賢者たちによれば、人体の墮落を取り除き何百年にわたって寿命を延ばしうると考えられているからである²¹⁾。

金が老化を遅らせる効果を持つことについては、上で検討した『老年の症状の遅延について』もすでに言及していたところである²²⁾。これ自体は注目すべきことではあるが、しかしそこでは単に自然状態における鉱物学的な効用を説いているだけのようである。またベイコン自身「例2」において、経験学が自然や錬金術が作り出すのにまさる金を作り出すならば、人体に驚くべき働きをなすことを述べている²³⁾。しかしそこで一見錬金術が劣っているようにみられるのは、そのころの錬金術には多くの詐欺が入り込んでいるとベイコンが考えたからであろう²⁴⁾。それに対して「例3」においては、彼の標榜する経験学に裏打ちされた錬金術による金を用いることによって老化を抑止しようとした点が注目に値する。

なお、この点に関しては『大著作』とともにその補遺として教皇に贈られた『小著作』においてベイコンは、議論に若干の深化を見せいている。マギステルの業による金 (aurum per magisterium) が自然の金よりも寿命を延長するにあたって優れていると主張しているのである²⁵⁾。しかし次にみていくように、彼の『六科学の書』においては、金を体内に摂取するということまで議論はさらに進むことになる。

3. ロジャー・ベイコン『六科学の書』における 寿命の延長 (prolongatio vitae) と金

ロジャー・ベイコンの少なくとも『大著作』において開始された長生術の議論は、それからおそらく約20年後つまり彼の晩年である1280年代または1290年代初頭のものと考えられる『六科学の書』(Liber sex scientiarum)

においてより深められ、具体化されてくる²⁶⁾。この著作が教皇宮廷に向けてのものであることを示すような根拠はないが、やがて確認できるように錬金術との関係で金を体内に摂取する行為について述べられている点において、後で考察する教皇宮廷周辺で実践されていた金の摂取を考える上で見逃すことはできないと思われる。彼が教皇に献呈した『大著作』においては卑金属から金を生成する秘薬が話題となっていたが、ここではさらに進んで、金そのものを体内に取り込むことが目指されるようになっている。さて、ペイコンは次のように書き出している。

「身体と、神と自然が定めた自然的な究極の限界までの寿命の延長の、しかるべき管理においては、天文学、錬金術そして光学、それに経験学の驚くべき力が光り輝いている²⁷⁾。」このようにペイコンは経験学のなかでも天文学と錬金術、光学を重視しているということが明らかであり、同様な言及は他の箇所でもしばしば確認できる。これに続けてペイコンは、人間が罪を犯して墮落したことにより本来の長寿が縮められ、死への早急さが生じたということを指摘する。これは『大著作』で展開したと同様のものであるが、ペイコンはさらに天文学と光学、錬金術を援用しつつ寿命の延長のための具体的な処方解説するにまでいたる。すなわち、まずは天文学的考察と光学器具を用いて星の光線を集め、食物と飲物、薬種と薬品、石と葉に星の力を与え、これを永遠の健康と寿命の延長にふさわしい人間は用いることができ、幼少時からこうむっていた養生法の欠如を回復し、長いこと老化の症状を遅らせ、そうでなくとも緩和することができるというのである²⁸⁾。

さらに錬金術師が次の役割を果たす。ペイコンによれば、錬金術師は金を、人間的な性質に変化して他の飲食物と同じようになるまで石化させ溶解させて (*calcinando et solvendo*) 飲食物に用いることができるように用意しなければならない。こうして用意された金は、あらゆる病に対して驚くべき効果を有し、健康を持続させ、驚くほど寿命を延ばす。特に、太陽と星の光線が用意されそれらの力を受け取る場合にそうである。裕福な者たちはしばしば金をレプラや多くの重病に用いるが、上述の仕方では用意しないために人間の性質に取り込まれない。しかし、元の状態は分離を経るとはいえその驚くべ

き力のためにそれに触れるだけですばらしく作用するという²⁹⁾。

また錬金術師は「均等な混合体」(corpus equalis complexionis) を用意しなければならない。「均等な混合体」とは、内部の四つの元素(火、空気、水、地)がそれらの力関係において均等であり、これら元素の一つが他によって支配されるのではなく、均等な体液によって構成されているものである³⁰⁾。

さらにバイコンは次のように続ける。「墮落は、形相が質料の欲求全体を満たすことができないということゆえに事物の中に生じるのであり、それゆえつねに別の形相を欲する。そして天体の作因は、自然の究極的善である均等な混合の形相(forma equalis complexionis)が生じるまで、その欲求を新しい形相へと押し向ける。そしてこのことは、墮落する事物の中にある質料の欲求を完全なものとし、墮落を取り除いてそれを永遠に排除するのに十分である³¹⁾。」

ここで一点想起しておこう。しばしば指摘されるように、中世において病は人間の外にある実体的なものとは考えられていなかった³²⁾。このような考えはむしろ近代的なものであって、中世において病とは個人の体内で起こる生理的な障害、体液の不均衡であり、したがって中世の医学は病原を取り除くというより人体の均衡を回復させるものであった³³⁾。バイコンにとって、このような均衡を得させて寿命の延長を実現する代表例は金であった。というのは、バイコンによれば、アヴィケンナの「靈魂論」がいうように金こそが地・水・空気・火によって朽ちるということがありえない「均等な混合体」なのである³⁴⁾。天文学者や光学者に求められるはたらきも、(金などの)「均等な体」を適正な星の光のもとに置くことにより老化を抑制し、寿命を延ばすためなのである³⁵⁾。最後に、金の摂取が13世紀後半の教皇庁において実践されていたことの証言をみていこう。

4. 教皇宮廷周辺における金の服用

—『哲学者達の生について』と寿命の延長(prolongatio vitae)—

アルナウ・ダ・ピラノバに帰されるが真作であるかは確実ではない『哲学

者達の生について』(De vita philosophorum) という著作がある。その第一部はベイコンの『若さの維持について』(De conservatione iuventutis) とほとんど同じであり、第二部はアルナウの『ワイン論』(De vinis) の抜粋で、最後の方には「飲用の太陽(ソル) または飲用金の構成について」および書簡が付されている³⁶⁾。この第二部、つまりアルナウの『ワイン論』からの抜粋は、高位聖職者たちが金を混ぜた食事をとっていたと述べている。

また特に高位聖職者のうちで最近の多くの者たちは、金のかけらを彼らの料理の中で煮立たさせている。また他の者たちは、舐剤とともに小さなパンで摂取している。また他の者たちは、二つのものつまり金と銀のいずれもの粉末が入ったディアカメロンという薬にあるような粉末とともに〔摂取している〕。またある者たちは、金のかけらを口に含めて用い、その金の唾液を呑み込む。また他のある者たちは飲用水へと向かい、それには少量の金で十分であり、またそれは健康を維持し人生の期間を延ばすためのものであり、そして信じがたいことであつたとしても、間違いなくそれがよりよい方法なのである³⁷⁾。

これに続く最後から二番目の章「飲用可能な太陽(ソル)の構成について」においては、具体的な個人名まで挙げて飲用可能な金を枢機卿たちが服用していたということを示唆している。

自然医学の中で最大の秘密である飲用金を受け取ること。そのようにフゴ氏は証言し主張した。事実彼がそれを飲用でき、柔らかく、蠟のように流れるものにしたのであり、彼はどのようにそれが作られ得るかを考えそして述べている、「おお、貴石の一つよ、貴い石の人為的な準備についてあなたに言われている通りである。このしくみはいまや、金によってレブラ、リリカ、プレティジカ、クリスカを緩和し、引き受けられ、胆嚢〔膀胱〕の結石が癒されるよう考案された。」飲用金は次のように作ることができる。ドラクマ貨を一枚と半分取り、かすの出ないよ

うそれを蒸留せよ。水は、私が前に教示したとおり、金が融けるような泉の水のように澄むであろう。そして金が融けたならば、すべての水が抜けるまで、極力弱い火で金から水を蒸留せよ。そうすると器の底にバターのように金が残るだろう。このようになされたら、命の水を一リブラ半取ること。まずードラクマでリンドウ少々をすりつぶし、それから密閉したガラス瓶の中の命の水にそれを入れ、そして水が濾過器で蒸留された後で、それを金と一緒にせよ。まず、それはバター状の金と呼ばれ、水は澄み、少なくとも黄色になり、まるでそれが黄色で蜜のように飲むことができるかようになるだろう。そしてあなたはワインやソースやあなたの食事に用いるだろう。というのも、それは多くの自然〔性質〕を支え、力づけ、活力を与え、回復させ、そして魂の力と最大限に記憶力とを強めるからである。それによりレプラは緩和され、麻痺は癒される。そしてトレドの枢機卿とすべての枢機卿たちが、枢機卿在職中生きている限り、食品に用いていて、彼らが知りまた持ち合わせている最大で最上の秘密であるとみなしていたということを知っておくように。この水は、とりわけそれが完全であるということのゆえに、金の中のすべてのティンクトゥラ〔チンキ〕の根源にして霊気 (spiritus) である³⁸⁾。

これまでの研究では、ここで登場したフゴとは1281年から1287年まで枢機卿を務めたイヴシャムのヒュー (Hugh of Evesham, †1287) で、トレドの枢機卿とは1244年から1275年まで枢機卿を務めたトレドのヨハンネス (John of Toledo, †1275) またはボニファティウス8世が1298年にトゥスクルムの司教枢機卿に任じたゴンサロ・グディエル (Gonzalo Gudiel) と考えられる³⁹⁾。いずれにせよ、13世紀の教皇宮廷においては枢機卿をはじめとする聖職者たちも金の服用を実践していたということは確かなように思われる。

もっとも、教会当局が錬金術を必ずしも容認していたというわけではない。14世紀、教皇庁がアヴィニオンに移ったあとの時点のことであるが、ニコラ・エムリク (Nicolas Aymeric, 1320—1399) の『錬金術師反駁』(Contra

Archimistas) によれば、教皇ヨハネス22世（在位1316—1334年）が自然哲学者と錬金術師とを集めて、錬金術の是非を問い、見解が分かれたため実際に試させたところ、錬金術師はうまくいかなかったため教皇は錬金術を禁じたという⁴⁰⁾。また、それよりも前、すでに1272年にはフランシスコ会は錬金術の文書を焼くことがならわしとなっていた。1313年にはシトー会も錬金術の廃止を宣言し、ドミニコ会は1273年に錬金術の研究、教育、実践を行わないことを定めた⁴¹⁾。しかしニコラの証言を信用するならば、教皇宮廷の錬金術に対する態度は初めから反対するものであったわけではないということが裏づけられる⁴²⁾。また、14世紀に現れるいくつもの錬金術の諸文書においては、少なくとも文書の内容においては、錬金術が「キリスト教化」される過程をたどることができるのも確かなのである⁴³⁾。

おわりに

本稿で扱った『老年の症状の遅延について』の著者は、『秘中の秘』に言及した最も早い時期の人物の一人である。この『秘中の秘』とはアリストテレスからアレクサンドロス大王宛ての書簡の体裁をとったアラビア語の偽書が12世紀に部分的に、そして13世紀にトリポリのフィリップスによって完全にラテン語訳されたものである。ロジャー・ベイコンは『秘中の秘』の注釈も著している⁴⁴⁾。また彼はその諸々の著作においてこの『秘中の秘』を引き合いに出してゐる。そして『老年の症状の遅延について』の著者もベイコンもアヴィケンナの『医学典範』をはじめとする諸著作もしばしば引いている。したがってベイコンを代表とするこの時期の知識人たちの議論には、古代ローマの文人や教父たちのみならず、アラビア経由の知識が多大な影響を与えているのは間違いないといえる。こうして、主に12世紀以来推進され13世紀においてもなお活発であったアラブの思想や科学、それにギリシアの思想が翻訳と研究によってヨーロッパに流入し流布したという時代背景を勘案するならば、その推進力の一つであり当代の知識人たちが集散した13世紀の教皇宮廷において、ラテン中世世界においても古くからの夢であった老化の抑止

と長寿のための具体的な処方実践に移されていたという事実をわれわれは理解することができるだろう。本稿ではロジャー・ベイコンやアルナウなどごく一部の科学者や医師のみを取り上げたが、彼らを含めたさまざまな知的エリートたちは東方由来のものも含めた哲学的また科学的な知識や技術を13世紀においてますます鍛え上げ、従来の養生術に加えて金の服用などのあらたな長寿のための処方を提供したといえる。

したがって、ヤコポーネ・ダ・トーディの浴びせたボニファティウス8世への非難は、このような文脈の中で理解されなければならない。つまり、教皇まで含めた教皇宮廷において実践されていた寿命を延ばそうという試みはあったものの、それは単純に魔術として片づけることができないのである。

寿命の延長を試みるための知識と技術を知識人たちが提供したのに対して、13世紀の教皇庁が「身体への配慮」に関心を寄せるようになっていたことを、教皇庁における医師に関連させてつけ加えておこう。教皇が自らのための医師をもっていることを史料上確実に知ることができるのは13世紀に入ってからである。そしてインノケンティウス3世の伝記によれば、この教皇はあらたなヴァチカンの宮殿に医師の住居を建てさせた⁴⁵⁾。さらに同じ教皇は聖霊施療院をヴァチカンのそばに創設したが、これは貧者や病人のためだけでなく、教皇や枢機卿専用の聖職者も配置していた⁴⁶⁾。そして13世紀を通じて、教皇庁では教皇の個人的な侍医や枢機卿のかかえた医師たちをほぼ途切れることなく確認することができる⁴⁷⁾。ボニファティウス8世期には、かのアルナウ・ダ・ピラノバを含め8人の教皇付の医師が知られている⁴⁸⁾。

すでに述べたとおり、錬金術については教皇庁の態度は否定的な方へ傾くことになるが、本稿が主に取り上げた13世紀後半から14世紀初頭の教皇宮廷においては、すべての教皇や他の聖職者たちが没頭したわけではないにせよ、寿命の延長が関心の的となり、場合によっては錬金術的な方法によってそれを実践しようとしていたのである。その場合、ロジャー・ベイコンが教皇クレメンス4世のために著した『第三著作』(*Opus tertium*)における「私的な人格は来世の不滅のために死を待望すべきであるが、教会を統治する者は私的な人格としてではなく公的な人格として長生きすべきである」という趣旨

の勧め⁴⁹⁾と同様な思考法が、寿命の延長の試みを正当化するものとなっていたかもしれない。

- 1) Lotario dei Segni (Pope Innocent III), *De miseria condicionis humane*, ed. Robert E. Lewis, Athens 1978 (The Chaucer library), pp. 107, 109 : De incommodis senectutis : In primordio condicionis humane nongentis annis et amplius homines vixisse leguntur. Set paulatim vita hominis declinante, dixit Dominus ad Noe: “Non permanebit spiritus meus in homine in eternum quia caro est, eruntque dies illius centum viginti annorum.” Quod intelligi potest tam de termino vite quam de spacio penitendi. Ex tunc enim rarissime leguntur homines plus vixisse, set cum magis ac magis vita recideretur humana, dictum est a psalmista: “Dies annorum nostrorum in ipsis septuaginta annis - si, autem, in potentatibus, octoginta anni; plurimum eorum labor et dolor.” “Nunc autem paucitas dierum meorum finitur brevi.” “Dies nostri velocius transeunt quam a texente tela succiditur.” “Homo natus de muliere, brevi vivens tempore” et cetera. Pauci nunc ad quadraginta, paucissimi ad sexaginta annos perveniunt. Si quis, autem, ad senectutem processerit, statim cor eius affligitur et capud concutitur, languet spiritus et fetet anhelitus, facies rugatur et statura curvatur, caligant oculi et vacillant articuli, nares effluunt et crines defleuunt, tremitt tactus et deperit actus, dentes putrescunt et aures surdesunt. Senex facile provocatur et difficile revocatur, cito credit et tarde discreditt, tenax et cupidus, tristis et querulus, velox ad loquendum et tardus ad audiendum, set non tardus ad iram; laudat antiquos et spernit modernos, vituperat presens et commendat preteritum, suspirat et anxiatur, torquetur et infirmatur. Audi poetam: “Multa senem circumveniunt incommoda” et cetera. Porro nec senes contra iuvenem glorientur, nec insolescant iuvenes contra senem, quia quod sumus iste fuit, erimus quandoque quod hic est. ロタリオ・デイ・セニ『人間の悲惨な境遇について』瀬谷幸男訳（南雲堂フェニックス、1999年）27-28頁より。
- 2) Iacopone da Todi, *Laude*, a cura di Franco Mancini, Bari 1974 (Scrittori d'Italia, 257), p. 250 : Pensavi per augurio la vita perlongare! Anno, dine né ora omo non pò sperare! Vedem per lo peccato la vita stermenare, la morte appropinquare quand'om pensa gaudere. ヤコポーネ・ダ・トーディ^{ツウヂ}「讃歌」

- 須賀敦子訳,『フランシスコ会学派』(中世思想原典集成12)(平凡社,2001年),763-852頁,ここでは844頁。
- 3) Heinrich Finke, *Aus den Tagen Bonifaz' VIII. Funde und Forschungen*, Münster i. W. 1902 [rpt, Roma 1964] (Vorreformationsgeschichtliche Forschungen, 2), p. XXXI : Papa enim non curat nisi de tribus et circa hoc totalis sua versatur intentio, ut diu vivat et ut adquirat pecuniam, tertium ut suos ditet, magnificet et exaltet.
 - 4) *Ibid.*, p. XXX : Dixerunt michi eciam aliqui cardinales, cum revelarentur michi predicta, quod papa etiam dixit eis, quod magister Arnaldus modo mense Julii preterito, dum sol esset in signo Leonis, fecit quendam denarium et quoddam bracale pape, que cum portaret, malum lapidis amodo non sentiret.
 - 5) *Ibid.*, p. XXXVI : inveni enim unum Catalanum facientem bona, scilicet magistrum Arnaldum de Villanoua, qui fecit michi sigilla aurea et quoddam bracale, que deffero, et servant me a dolore lapidis et multis aliis doloribus et facit me vivere.
 - 6) ただし,中世では人体と惑星や黄道十二宮との関係において,通常は獅子座は胸部や心臓に対応するとされていて,腎臓に対応するのは天秤座であった。Nicolas Weill-Parot, "Astrologie, médecine et art talismanique à Montpellier : les sceux astrologiques pseudo-arnaldiens", *L'Université de médecine de Montpellier et son rayonnement (XIIIe-XVe siècles). Actes du colloque international de Montpellier, organisé par le Centre historique de recherches et d'études médiévales sur la Méditerranée occidentale (Université Paul-Valéry - Montpellier III), 17-19 mai 2001*, sous la direction de Daniel Le Blévec avec la collaboration de Thomas Granier, Turnhout 2004 (De diversis artibus, 71), pp. 157-174, here p.173 ; *Idem*, "Arnaud de Villeneuve et les relations possibles entre le sceau du Lion et l'archimie", *Arxiu de textos catalans antics* 23-24 (2005), pp. 269-280, here pp. 273-274は15世紀のカタルーニャ人医師ジェローニ・トゥレツリヤ(Jeroni Torrella)を典拠として,獅子座宮に位置する際の太陽の役割に注目している。
 - 7) *Ibid.*, pp. 275, 280.
 - 8) "Liber (Epistola) de retardatione accidentium senectutis", in *Fratris Rogeri Bacon De retardatione accidentium senectutis*, cum aliis opusculis de rebus medicinalibus, nunc primum ediderunt A. G. Little, E. Withington, Oxonii 1928 [rpt, Farnborough 1966] (Opera hactenus inedita Rogeri Baconi, 9), pp. 1-83. 本書は以下*De retardatione*とする。

- 9) 写本の中には神聖ローマ皇帝にしてシチリア王であったフリードリヒ2世 (Friedrich II, 1194-1150) に宛てられているものもある。両者に別々に宛てられていることは、当時皇帝の宮廷と教皇の宮廷の間に知的エリートと彼らの知識の交流があったことを示している。
- 10) パラヴィチーニ・バリアーニはこの著者がロジャー・ベイコンであるという見解には否定的である。Agostino Paravicini Bagliani, *Medicina e scienze della natura alla corte dei papi nel Duecento*, Spoleto 1991 (Biblioteca di medioevo latino, 4), pp. 281-326. これに対してマツウィーニはやはりベイコンの著作であると主張している。また彼によればこの著作は1236年と1267年の間に著されたということになる。De senectute. Testi di Galeno R. Bacone e Cardano, a cura di Innocenzo Mazzini, Torino 2004, pp. 66-67. なおモルブルゴも同じく著者がベイコンであるとの立場に立っている。Piero Morpurgo, “Oro potabile e *prolongatio vitae*: fonti e influssi della cultura scientifica alla corte di Bonifacio VIII”, in *Bonifacio VIII. Atti del XXXIX Convegno storico internazionale. Todi, 13-16 ottobre 2002*, Spoleto 2003 (Atti dei Convegni del Centro italiano di studi sul basso medioevo - Accademia Tudertina e del Centro di studi sulla spiritualità medievale, Nuova serie 16), pp. 445-472.
- 11) のちにマルシリオ・フィチーノ (Marsilio Ficino) が1489年に出版された『生命論三書』(*De vita libri tres*)の第二書『長寿論』(*De vita longa*)を書き上げるにあたって参照された可能性もある。John R. Clark, “Roger Bacon and the Composition of Marsilio Ficino’s *De vita longa* (*De vita*, Book II)”, *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes* 49 (1986), pp. 230-233, here pp. 230-231. クラークの考えでは、フィチーノ本人はアルナウ・ダ・ビラノバの*De retardanda senectute*を参照したつもりでいたかのようなものであるものの実際には『老年の症状の遅延について』を参照した。
- 12) 各所の典拠については編者が照合している。*De retardatione*, *op. cit.*, pp. 209-211.
- 13) *Ibid.*, p. 2 : ut altissimus Deus conseruet in vobis corporis vires et thesaurum sapientie vsque ad terminum naturalem quem ipse posuit in sua potestate.
- 14) *Ibid.*, p. 3 : quarum vna est per regimen sanitatis, ut vult Avicenna in prohemio sui regiminis, vbi dicit: Ars custodiendi sanitatem a duabus rebus securitatem prebet homini etc. Alia est proprietas quarundam medicinarum quas anitiqui occultauerunt.
- 15) *Ibid.*, p. 81 : Et in hoc differt regimen sapientum a regimine epistole nostre. Nam regimen sapientum senum conseruat quodlibet corpus secundum

naturam suum (*sic*) in sanitate, et non defendit illa incomoda et accidentia venire ante tempus et retardare ne festinent venire, et in hoc differt regimen traditum a sapientibus a regimine epistole, quia vnum conseruat sanitatem et aliud retardat accidentia.

- 16) *Ibid.*, p. 15 : Quarum una latet in visceribus terre. Altera natat in mari. Tertia repit super terram. Quarta vegetatur in aere. Quinta assimilatur medicine que egreditur de minera nobilis animalis. Sexta egreditur de animali longe vite. Septima est medicina sive res cuis minera est planta Indice.
- 17) *The 'Opus majus' of Roger Bacon*, edited, with introduction and analytical table by John Henry Bridges, London 1900 [rpt, Frankfurt/Main 1964]. 本書は以下*Opus Majus*とする。本稿で扱う部分に関しては邦訳があり、引用した箇所がある。ロジャー・ベイコン『大著作』高橋憲一訳(科学の名著3)(朝日出版社, 1980年), 396-406頁。教皇への献呈の年代についてはDavid C. Lindberg, *Roger Bacon's Philosophy of Nature. A Critical Edition, with English Translation*, Oxford 1983, p. xxv.
- 18) 「例2」。 *Opus majus, op. cit.*, pp. 204-213.
- 19) *Ibid.*, p. 205 : Et ideo patres corrumpuntur, et generant filios corruptos, et habentes dispositionem ad mortis festinationem. Et deinde per defectum regiminis filii corrumpunt seipos, et sic filius filii habet dispositionem malam duplicem, et tertio seipsum corrumpit propter defectum regiminis. Et sic currit de patre in filios corruptio complexionis, usquequo festinatio facta sit ultimata, sicut accidit his temporibus.
- 20) 中世の錬金術についての研究の流れについては、平井浩「西欧中世・近世の化学史の研究動向」『科学史研究』第40巻(2001年)65-74頁を参照。
- 21) 「例3」。 *Opus majus, op. cit.*, p. 215 : Propter hoc Aristoteles dixit ad Alexandrum 'volo ostendere secretum maximum'; et vere est secretum maximum nam non solum procuraret bonum reipublicae et omnibus desideratum propter auri sufficientiam, sed quod plus est in infinitum, daret prolongationem vitae. Nam illa medicina, quae tolleretur omnes immunditias et corruptiones metalli vilioris, ut fieret argentum et aurum purissimum, aestimatur a sapientibus posse tollere corruptiones corporis humani in tantum, ut vitam per multa secula prolongaret.
- 22) 「粘液を除去する医薬は、鉄くずを含むものであるが、金を含むものはさらに優れている。これはアヴィケンナが第四典範「老化遅延の事物」でいうとおりであり、このように金は粘液を除去する特性を有している。」 *De*

retardatione, *op. cit.*, p. 52 : Confectiones que abscindunt materiam fleumaticam sunt omnes ille in quibus ponitur scoria ferri, sed meliores sunt in quibus ponitur aurum, ut dicit Avicenna in 4° de rebus que canicem retardant, et sic aurum habet proprietatem abscindendi materiam fleumaticam.

- 23) 「例2」。 *Opus majus*, *op. cit.*, p. 210 : Et si per experientiam certam fieret optimum quod potest esse, vel saltem longe melius quam natura et ars alchimiae possunt facere, sicut fuit vas quod rusticus invenit, et resolveretur illud in aquam qualem bibit bubulcus, tunc miram operationem faceret in corpus hominis.
- 24) 「例3」。 *Ibid.*, p. 214 : Et quia haec ars ignoratur a vulgo eorum qui auro inhiant, oportet quod multiplices fraudes fiant in hoc mundo.
- 25) “Opus minus”, in *Fr. Rogeri Bacon Opera quaedam Hactenus inedita*, ed. J. S. Brewer London 1859 [rpr, Nendeln 1965] (*Rerum Britannicarum Medii ævi scriptores, or Chronicles and memorials of Great Britain and Ireland during the Middle Ages*, 15), p. 375 : Sed aurum per magisterium, ut dicit Avicenna, libro De Anima, est melius naturali. Et similiter est magna differentia inter modos auri de magisterio, et optimum est quod fit per illud quod est aequalis complexionis. Et prolongat vitam.
- 26) “Liber sex scientiarum”, in *De retardatione*, *op. cit.*, pp. 181-186において部分的に収録されている。この著作についてはWilliam R. Newman, “The Philosopher’s Egg: Theory and Practice in the Alchemy of Roger Bacon”, *Micrologus. Natura, scienze e società medievali. Nature, Sciences and Medieval Societies* 3 (1995), pp. 75-101; *Idem*, “An Overview of Roger Bacon’s Alchemy”, in *Roger Bacon and the Sciences. Commemorative Essays*, ed. Jeremiah Hackett, Leiden; New York; Köln 1997 (*Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters*, 57), pp. 317-336; Agostino Paravicini Bagliani, “Ruggero Bacone e l’alchimia di lungavita. Riflessioni sui testi”, in *Alchimia e medicina nel Medioevo*, a cura di Chiara Crisciani e Agostino Paravicini Bagliani, Firenze 2003 (*Micrologus’ Library*, 9), pp. 33-54を参照のこと。
- 27) “Liber sex scientiarum”, *op. cit.*, p. 181 : In debito regimine corporis et prolongationis vite ad ultimos terminos naturales, quos deus constituit et natura, relucet miranda potestas astronomie, alchimie et perspective, et scientiarum experimentalium。中世においてperspectivaは視覚についての研究を含む「光学」を意味する。
- 28) *Ibid.*, pp. 182-183 : Et ideo excogitauerunt autores scientiarum

experimentalium, et alkimie, et perspective, astronomie operatiue, quomodo repararent defectum regiminis sanitatis, quem omnis homo contrahit a natiuitate. Et inuenerunt per experientiam, qua vtuntur bruta, preciosos lapides et herbas mirificas quibus vtuntur, quos et quas etiam cum speciebus secretis et cibis et potibus specialibus docent poni in congretatione radiorum stellarum mirifice virtutis, quarum tempus notant per astronomicam considerationem et quorum congregationem faciunt per instrumenta perspectiue, quibus possunt radii congregari per reflexiones mirabiles et fractiones mirabiliores, ut ad quemcumque locum velimus, siue in mensa siue alibi, ducantur virtutes stellarum, que stellificent cibos et potus et species et medicamina et lapides et herbas, quibus vtantur homines digni sanitate perpetua et prolongatione vite, ut reparetur subito defectus regiminis quem contraximus ab infantia, et diu retardentur passionibus senectutis, et cum vltius retardare non potuerint, mitigentur cum venerint, ut non inferant violentiam nature quin vltimos vite terminos comprehendat.

- 29) *Ibid.* : Sed vltius experimentator iubet alkimie preparare ei aurum calcinando et soluendo ut possit vti eo in cibis et potibus quatinus possit conuerti in naturam humanam, sicut alius cibus et potus. Sic enim preparatum mirabilem effectum habet contra omnem infirmitatem, et ut sanitatem faciat continuam et ut vitam prolonget miro modo, precipue si in radiis solis et stellarum preparetur et eorum virtutem receperit, ut oportet. Diuites homines multoties vtuntur auro contra lepram et multas graues infirmitates, sed quia non preparatur modo dicto, ideo non incorporatur humane nature, sed tamen propter eius virtutem mirabilem solo tactu suo operatur magnifice licet integrum transeat per secessum.
- 30) *Ibid.* : Experimentator tamen extendit considerationem ad maiora, et iubet alkimiste, ut corpus equalis complexionis preparet sibi, in quo omnia elementa sint equalia quantum ad virtutes, et non dominetur in eo ignis, sicut in colera et colericis, nec aer, sicut in sanguine et sanguineis, nec aqua, sicut in fleumate et fleumaticis, nec terra, sicut in melancolia et melancolicis, sed sit compositum ex humore equali.
- 31) *Ibid.*, pp. 183-184 : corruptio accidit in rebus propter hoc quod forma non potest complere totum appetitum materie, et ideo semper appetit alteram formam et agentia celstia sufficiunt ad promouendum eius appetitum semper in nouam formam vsque quo inducatur forma equalis complexionis, que est

ultimum bonum nature, et hoc sufficit ad perficiendum in rebus corruptibilibus appetitum materie et tollere corruptionem et excludere in eternum.

- 32) Peter H. Niebyl, "Sennert, Van Helmont, and Medical Ontology", *Bulletin of the History of Medicine* 45 (1971), pp. 115-137, here p. 115がこれに関するパーゲル (Walter Pagel) の見解を要約している。ただし、中世と近世でそれほど明瞭な差異があるかどうかはなお検討の余地があろう。
- 33) Faye Marie Getz, "To Prolong Life and Promote Health. Baconian Alchemy and Pharmacy in the English Learned Tradition", in *Health, Disease and Healing in Medieval Culture*, ed. Sheila Campbell, Bert Hall, David Klausner, Basingstoke 1992, pp. 141-151, here p. 145.
- 34) "Liber sex scientiarum", *op. cit.*, p. 184 : Et quod hoc non sit alienum in istis rebus corruptibilibus, dabimus exemplum in auro, quod est equalis complexionis, quia non potest corrumpi per terram nec aquam nec aerem nec ignem, sicut dicit Auicenna in libro maioris alkimie.
- 35) *Ibid.*, pp. 184-185 : Cum igitur experimentator magnificus preparauerit hoc corpus equalis complexionis, iubet astronomo ut ortum stellarum virtuosarum super orizonta de futuro consideret et occasum stellarum prae actionis ad illud tempus, et iubet perspectiuo ut cum adiutorio geometrie fiant instrumenta congregantia radios in quibus ponatur illud corpus equale, ut, postquam receperit virtutes mirificas stellarum, possit miro modo tollere defectum regiminis vite contractum a iuuentute et restaurare totum deperditum et retardare passiones senectutis et cum venerint, eas mitigare feliciter, ut vita mirabiliter prolongetur.
- 36) Antoine Calvet, "Le *De vita philosophorum* du pseudo-Arnaud de Villeneuve. Texte du manuscrit B.N. lat. 7817 édité et traduit", *Chrysopæia* 4 (1990-1991), pp. 35-79, here p. 35. カルヴェは15世紀の写本の校訂をおこなっている。
- 37) *Ibid.*, p. 72 : Et multi modernorum, specialiter de prelatis, faciunt bulire pessias auri in eorum coquina. Et alii recipiunt in panniculis, cum lectuariis. Et alii cum limatura, sicut in confectione que dicitur dyacameron in quo intrat vtriusque scilicet auri et argenti limatura. Et quidam vtitur tenendo frusta auri in ore et saluam dicti auri deglutiunt. Et quidam alii conuertuntur in aquam potabilem, et sufficit modica quantitas in auro, et est preseruatum sanitatis et prolongatium generationis vite, et licet difficile sit credere, sine dubio ille est melior modus.
- 38) *Ibid.*, p. 74 : Recipe aurum potabile quod est maximum secretum in medicinis

naturalibus. Ita iurabat et affirmabat Dominus Hugo. Fuit enim inuentum ut eum faceret potabile molle et fluxibile, velut cera et quomodo posset fieri extimat et dicit: O margaritis unam, sicut vobis dictum est de artificiali preparatione lapidum pretiosorum; tunc fuit iuuenta hoc compositio, ut cum auro palliarent lepram et liricam, pertizicam, criscicam, susceptari et calculus in vesica curari.

Aurum potabile sic facias: Recipe aque huius drachma una et semis, et distilla eam sine fecibus; et erit clara aqua, sicut aqua fontis, in qua dissoluas aurum, sicut docui prius; et eo dissoluto, distilla aquam ab auro lentissimo igne, donec aqua tota extrahatur et remanebit aurum in fundo vasis, sicut butirum. Hoc facto, recipe libram semis aque vite. Genssiane ante drachma una terantur aliquantulum, postea ponantur in aquam vite in una ampula vitrea bene clausa, et postea aqua adhuc per filtrum distillata, pone cum auro. Primo. butirum auri uocatur et fiet aqua clara tamen crocea, ac si fuisset tincta croco et potabilis, prout mel et vere in vino uel in salsamento in prandiis tuis quod multum sustentat naturam, et confortat reuiuescit, reficit, et confortat virtutes anime et maxime memoriam. Cum ea palliatur lepra et curatur paralis. Et scias quod dominus cardinalis de Toletio et omnes cardinales fuerunt usi in cibariis, quandiu vixerunt in cardinalatu, et habuerunt pro maiori et meliori secreto quod scirent uel haberent. Ista aqua est radix et spiritus omnium tincturarum in auro, specialiter quia est perfecta.

- 39) Agostino Paravicini Bagliani, *Boniface VIII. Un pape hérétique ?*, Paris 2003, p. 293. より具体的には, *Idem.*, *Medicina e scienze, op. cit.*, pp. 263-264, 351.
- 40) Chiara Crisciani e Michela Pereira, *L'arte del sole e della luna : alchimia e filosofia nel medioevo*, Spoleto 1996 (Biblioteca di "Medioevo latino", 17), pp. 253-256 のイタリア語訳を参照。
- 41) Cf. Morpurgo "Oro potabile e *prolongatio vitae*", *art. cit.*, p. 468.
- 42) 教皇と錬金術との関係, 特に15世紀の教皇(対立教皇)フェリクス5世についての研究として, Chiara Crisciani, *Il papa e l'alchimia. Felice V, Guglielmo Fabri e l'elixir*, Roma 2002 (La corte dei papi, 10) がある。
- 43) この点については, Antoine Calvet, "L'alchimie médiévale est-elle une science chrétienne ?", *Les dossiers du Grihl, Libertinage, athéisme, irreligion. Essais et bibliographie*, mis en ligne le 3 septembre 2007 (URL : <http://dossiersgrihl.revues.org/document321.html>).
- 44) *Secretum secretorum : cum glossis et notulis : tractatus brevis et utilis ad*

- declarandum quedam obscure dicta fratris Rogeri*, nunc primum edidit Robert Steele; accedunt, versio Anglicana ex Arabico edita per A. S. Fulton, Oxonii 1920 (Opera hactenus inedita Rogeri Baconi, 5).
- 45) *The “Gesta Innocentii III”*, text, introduction and commentary by David Richard Gress-Wright, Ph. D. Dissertation, Bryn Mawr College 1981, chap. 144 : emit etiam domum inter clausuram palatii, quam ad habitationem medici deputari.
- 46) Borwin Rusch, *Die Behörden und Hofbeamten der päpstlichen Kurie des 13. Jahrhunderts*, Königsberg; Berlin 1936 (Schriften der Albertus-Universität, Geisteswissenschaftliche Reihe, 3), pp. 69-70.
- 47) Paravicini Bagliani, *Medicina e scienze*, *op. cit.*, pp. 1-51.
- 48) Thérèse Boespflug, *La curie au temps de Boniface VIII. Étude prosopographique*, Roma 2005 (Bonifaciana, 1), p. 554.
- 49) 次の引用のうち最初の方は『靈魂不滅論』を典拠にしている。“Opus tertium”, in *Fr. Rogeri Bacon Opera quædam Hactenus inedita*, *op. cit.*, p. 87 : non propter se in quantum est persona singularis, sed in quantum publica, et habet alios dirigere et salvare. ... et specialiter propter hoc quod habetis ecclesiam Dei in potestate vestra, et mundum totum habetis dirigere. Cf. Agostino Paravicini Bagliani, *Le corps du pape*, Paris 1997, p. 266. この作品はクレメンス4世には届けられなかった可能性もあるが⁸ (Cf. Lindberg, *op. cit.*), バイコンの考え自体は注目すべきである。

(ふじさき・まもる 東京大学大学院人文社会系研究科)

Prolongation of Life (*prolongatio vitae*) in the Latin Middle Ages: Roger Bacon, Alchemy, and Roman Curia

Mamoru Fujisaki

In the 13th century, we encounter a lot of works or treatises about the prolongation of life (*prolongatio vitae*) around the Roman Curia. For example, the *De retardatione accidentium senectutis* which was sent to the pope Innocent IV aimed to postpone the aging by means not only of the familiar regimen but also of the use of *occult* medicines. Roger Bacon, in his *Opus majus* dedicated to another pope, Clement IV, deepened discussion on the *prolongatio vitae* by proposing in his turn the alchemy because, for him, gold could get rid of human corruption and prolong his life. Furthermore, he argued that the alchemist should prepare gold so that one might take it into his body to prolong life. In the *De vita philosophorum*, attributed to Arnald of Villanova, the author tells us that the prelates ate or drank fragments of gold which could conserve the juvenescence and prolong life generation and that even the cardinals took potable gold which could vigorate them and cure diseases. Arnald of Villanova cured a renal calculus of Boniface VIII making him a golden seal of Lion and a belt. We may find here a relationship of medicine with astronomy and perhaps with alchemy in Roman Curia. Both the author of the *De retardatione accidentium senectutis* and Roger Bacon referred often the works of Avicenna, pseudo-Aristotle, and many arabic authors. This fact leads us to the point of view that in the 13th century, influenced by the arabic works on medicine and alchemy, the intellectual *élites* were concerned much with the *prolongatio vitae* and offered to the popes or curialists the theories to practice it. We must also pay attention to the fact that papal physicians began to be attested almost always from the early 13th century. It is significant that this phenomenon coincides with the interest in the *prolongatio vitae* found in the 13th century Roman Curia.